

世界文学全集 7

C. ブロンテ
ジェイン・エア

阿部知二 訳

河 出 書 房

世界文学全集 7 C・ブロンテ



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和36年9月20日 初版発行
昭和44年11月8日 35版発行

定価 430 円

訳 者 阿 部 知 二
発 行 者 中 島 隆 之
印 刷 者 小 笠 原 秀 雄
装 幀 原 弘

印 刷・株式会社 秀好堂印刷
製 本・加藤製本株式会社

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
0397—310107—0961

目 次

ジエイン・エア 一

年 譜 五六

解 説 (阿部知二) 三二

ジ
ェ
イ
ン
・
エ
ア

主要人物

ジェイン・エア この物語の女主人公。孤児となり、母方の伯父の家に引き取られたが、伯父なきあと、虐待冷遇を受け、慈善学校に追いやられる。しかし独力で運命を切りひらき、苦難ののち幸福な生涯に入る。瘦せて青白く、決して美人ではないが、美しい魂とすぐれた才能をもち、内にはげしい情熱をたたえた女性。

リード夫人 ジェインの母方の伯父（ゲーツヘッドの治安判事）の未亡人。ジェインをきらって虐待する。

ジョン・リード } リード夫人の子供たち。
イライザ }
ジョージアナ }
ブロクルハースト }
ロウウッド慈善学校の偽善的な管理人。

マライア・テンブル先生 ロウウッド学校の監督。
ヘレン・バーンズ ロウウッド学校の女生徒。
エドワード・ロチェスタ ソーンフィールド荘の主
人。中年で浅黒く、にがみのある顔だちと、堂々たる

体格の金持の紳士。貪欲な父と兄との奸計で、不幸な結婚をし、数奇な運命にもあそばされ、ゆがめられているが、魂の底には豊かな愛と真実を持つ人。

フェアファクス夫人 ロチェスタ家の家政婦。
バーサ・メイスン エドワードのきちがいの子。
アデール ロチェスタの一人娘。
グレイス・ブール ロチェスタ家の召使。
セント・ジョン・エア・リヴァーズ モートン地方の没落旧家出の若い牧師。ギリシア型の美男子で、活動的で学問もあるが、神の福音を地上にもたらす偉大な高貴な目的のためには、人間的な感情さえも犠牲にしてはばからない、尊敬はできても愛情はもてないような人。のちジェインの従兄であることがわかる。

ダイアナ・リヴァーズ } セント・ジョンの妹たち。
メアリ・リヴァーズ }
ハナ リヴァーズ家の女召使。
ロザモンド・オリヴァー モートン地方の金持の令嬢。

その日は、散歩などできそうにもなかった。なるほど、朝のうち一時間ばかり、葉の落ちた灌木林の中をぶらぶらしてはみたが、昼食がすんでからは（リード夫人は友だちがこないときには早めに食事をした）、冷たい冬の風がひどく暗うつな雲をまねきよせ、ひどく身にしみるような雨を呼んだので、それ以上戸外の運動をするのは、もうできない相談だった。

わたしは、それがうれしかった。長い散歩は、とくに寒い午後にはいやでたまらなかったからだった。手足の指をかじかませ、保母のベッシーにしかられて悲しい思いをし、リード家のイライザやジョンやジョージアナなどよりも体力が劣ることを知っていじけた気持ちになり、冷えびえとするたそがれどきに家へ帰ってくるのは、思ってもぞつとすることだった。

いまいったイライザやジョンやジョージアナは、もう客間で母のまわりに集まっていた。母は暖炉のそばの長

椅子にもたれ、かわい子どもたちに（このときは、たがいにけんかもしていなかったし、泣きさけんでもいなかった）かこまれて、まったく幸福そうだった。そして、わたしを仲間はずれにしておいて、彼女はいうのだった。おまえをそばへ寄せつけないようにしなければならぬのは残念だけれど、おまえが、もっと人好きのする子どもらしい性質、もっと気持のいい快活な態度——つまりいつてみれば、もっとほがらかな、あつさりとした、自然さを——身につけようと本気になってつとめていることを、ベッシーから聞くなり、わたしのこの目で見るとなりしないうちは、満ちたりた明るい子どもたちだけにあたえる特権を、おまえにはさずけるわけにゆかないのだ、と。

「ベッシーは、わたしが何をしたっていいましたの？」とわたしはたずねた。

「ジェイン、わたしは理屈をこねまわしたり、なんののかと聞きたがる人はきらいなのよ。それに、子どもくせに、そんなふうに大人をなじるなんて、ほんとにかわいらしくもない。どこかに腰をかけて、感じよく口がきけるようになるまで、黙っていなさい」

客間のとなりには小さな朝食用の食堂があった。わたしはそつとそこへもぐりこんだ。そこには本棚があつた。わたしはすぐに、さし絵がたくさんついているのを

と氣をくばつて、一冊の本を手にした。窓下の腰掛けにのぼつて、両足をちぢめてトルコ人みたいにあぐらをかいた。そして赤い毛織りのカーテンをほとんどびったりと引いて、二重の隠れ場所におさまった。

深紅のたれ布のひだが右手の視野をさえぎっていた。

左がわは、透きとおった窓ガラスで、それは荒々しい十一月の空氣からわたしをまもつてはくれたが、引きはなしたわけではなかった。本のページをめくりながら、ときどきわたしは、その冬の午後の様子に目をやった。はるか遠くは霧と雨との青白い空白になっており、近くには雨にぬれた芝生と嵐に打たれた灌木とがながめられ、止めどもなく降る雨は、長いもの悲しげにひびく強風にけしき吹きまくられていた。

わたしは本——ビュイックの「英国鳥類史」に目をもどした。大体のところ、その本の本文はどうでもよかったけれども、前置きの何ページかは、子どもながらに、白紙のように見のがすことは、できなかった。それは海鳥の棲息地、海鳥しか住んでいない「孤独な岩や岬」とか、ノルウエーの最南端の岬リンドネス、別名ネイズ(岬)から北岬にかけての、小島が散在するノルウエー海岸とかのことが書いてあるページだった——

そこに北海は大いなる渦を巻きて

さいはての北冥の、裸なる暗き島々をめぐるて

荒れて沸き立ち、また大西洋の波濤は

嵐ほゆるへブリデーズの島々の間におどりこむ

またラブランド、シベリヤ、スピッツベルゲン、ノヴァ・ゼムブラ、アイスランド、グリーンランドなどの荒涼たる海岸を、「北極地帯の広大なる地域、陰惨な、人の見捨てた地方——この、霜と雪との貯蔵地では、幾世紀にもわたる冬の堆積物である堅い氷原が、アルプスの峰をいくつも積みあげたほどに凍りつき、極地をとりかこみ、極寒の幾倍もの酷烈さを凝縮している」とのべているあたりも、読みとばすことはできなかった。こうした死のように青白い地域について、わたしはわたしなりに想像してみた。それは、子どもたちの頭にぼんやりとただよう、なかばしか理解されていない想念の例にもれず、とりとめもないものだったが、そのくせふしぎに印象が強かった。こうした前置きのページの文句は、つぎにあるさし絵と結びついて、大波やしぶきの中にぼつんと立っている岩石とか、人影もない岸べに打ちあげられたこわれた小舟とか、いままさに沈もうとしている難破船を横雲のすき間からちらとながめている冷たく青白い月などに、意味をあたえるのだった。

またこの上なくさびしげな教会の墓地の絵があり、そこには銘をきざんだ墓碑があり、門があり、木が二本立ち、ひくい地平線をこわれた塀がさえぎり、のぼったば

かりの三日月が夕暮れどきであることを示していたが、それらにつきまとう感情を、わたしはいいあらわす力をもたない。

波ひとつない海上に、風のため浮かんできりじつと動きもしない二そこの船を、わたしは海の幽霊だと思つた。

悪魔が泥棒の背負った包みをうしろから取り押さえているところは、いそいでページをさきにめくつた。恐怖そのものだったからだ。

岩の上に超然と腰をおろして、絞首台のまわりに集まつた遠くの群集をながめている、黒角をはやしたものの絵も、そうだった。

どの絵もそれぞれ一つの物語を告げていた。わたしの未熟な理解力とおさな感情とは、測り知れぬことも多かったが、しかも、いつも底知れぬほど興味があつた。ベッシーが冬の夜、ときどき話してくれる話にとらぬほどだった。そういうときの彼女は、たまたま上きげんで、子供部屋の暖炉のそばに火のし台を持ってきて、そのまわりにわたしたちをすわらせ、リード夫人のレースの縁飾りを仕上げたり、ナイトキャップの縁にひだを寄せたりしながら、古いおとぎ話や、その他の「(多くの版では、訂正されて)民謡から、それからまた(あとなつて、わたしは知つたのだが)「バメラ」(サミュエル・リチャードソンの作品で、一七四〇年に出た小説)

や「モアランド伯爵ヘンリ」(ヘンリ・ブルック、一七〇三—一八三が書いた小説)の文章からとつた恋物語とか冒険談の一節とかを聞かせてくれて、熱心に耳をかたむけるわたしたちの心を満たすのだつた。

ビューイックの書物をひざにのせて、そのときのわたしは楽しかった。少なくとも、わたしなりに楽しかった。じゃまされはしないかと、そのことだけは心配だったが、そのじゃまがあまりにも早くきたのだった。朝食用の食堂の扉がひらいた。

「こら！ ふさぎ屋！」とジョン・リードの声がひびいた。それから彼はだまりこんだ。部屋にはだれもいないらしいと見たのだ。

「あいつ、いったいどこにいるんだろう？」と彼はつづけた。「リジー！ ジョージー！(と、きょうだいたちに呼びかけながら)ジョーン(ジェインはジョーンの変形である—訳者)のやつ、ここにはいないよ。雨の中をおもてへ出て行つたんだと、かあさまに話してやれよ——悪いやつめ！」

「カーテンを引いておいてよかったわ」とわたしは思った。この隠れ場所が彼に見つかりませんようにと一心に願つた。いや、ジョン・リードだったら見つかりつこないだろう。彼は目にしても勘にしても、すばしこくはないのだ。ところがこのとき、イライザが戸口から顔を出して、たちまち口をひらいた——

「きつと、窓の下の腰掛けにいるわよ、ジャック」(ジャックはジョンの愛称—訳者)

そこでわたしはすぐに出て行つた。というのは、あのジャックに引きずり出されることを思うと、身ぶるいしてきたからだつた。

「何か用があるの？」と氣おくれしておずおずと、わたしはたずねた。

「リードさま、何かご用でございますか」といえるという返事だつた。「こつちへこいというんだ」といって、彼は肘掛け椅子に腰をおろすと、こつちへ寄つて自分の前へ立てという身ぶりをした。

ジョン・リードは十四歳の学校生徒だつた——わたしはまだ十歳だつたので、四つ年上だつた。年の割りにはからだが大きくふとつており、皮膚はうす黒く、不健康で、顔がだだっぴろくて、目鼻立ちはむくんだやうで、手足がふとく、指さきも大きかつた。食事のときはがつがつ食べるのがならわしなので、そのため胆汁質になり、目はかすんでただれ、頬がたるんでいた。いまは学校へ行つていなければならぬはずなのに、「身体虚弱」という理由で、母親が家につれもどしてから、もう一、二か月になつてゐる。先生のマイルズさんは、家から送つてよこすケーキや砂糖菓子がつとすくなかつたならば、からだのほうはずいぶんよくなるのだがと断言して

いたが、母親はそんなきびしい意見には耳をかそうとはせず、ジョンの血色の悪いのは、勉強をしすぎるためと、おそらく家が恋しくてならないためとだろうという、もつとお上品な考えにかたむいていた。

ジョンは、母親にも姉妹にもあまり愛情をもつていなかったし、わたしにたいしては憎しみをもつていた。わたしにはいばり散らして、ひどい目にあわせた。それも週に二、三度どころではなく、日に一、二度どころでもなく、ひっきりなしだつた。わたしは全神経で彼を恐れ、彼が近づいてくると、骨についている肉という肉がちぢみあがるのだった。彼から受ける恐怖感のために氣をうしなうほどになることが間々あつたが、それは彼がおどかしたりいじめたりしても、どこへも訴えようがなかつたからだつた。召使たちは、坊ちゃまに逆らつてもわたしは味方をして、彼の怒りを買いたくはなかつたし、リード夫人は、この問題については盲目でつんぽだつた。夫人の面前でときどき、いないところではもつとたびたび、わたしをなぐつたり、ののしつたりしても、見えもしない、聞こえもしないふりをしていた。いつものようにジョンのいうことを聞いて、わたしは椅子に近づいた。彼は約三分ほど、わたしに向かつて舌を、つけ根のところが痛みかねないほど、できるだけ突きだして見せた。わたしは、彼がすぐになぐりつけてく

ることがわかつていたので、その一撃を恐れながらも、やがてかかつてくる彼の、むかつくような不快な顔をつくづくながめた。彼はわたしの顔からその氣持を読みとつたのだろうか、いきなり、ものもいわずに力まかせにわたしを打った。わたしはよろよろとしたが、からだの平衡を取りもどすと、椅子から二、三步あとへさがった。

「これはな、さっき、こしゃくにもかあさまに口答えしたからだぞ」と彼はいった。「それに、こそそカーテンのうしろに隠れたり、さっきみたいな目つきをするからだ、このねずみめ！」

ジョンの惡たいには慣れていたので、わたしはそれに答えようと思ったことはなかった。わたしの心配は、侮辱のあとにかならずやってくる攻撃に、どう耐えようかということだった。

「カーテンのうしろで、何をしてたんだ？」と彼はたずねた。

「本を読んだのよ」

「その本を見せろ」

わたしは窓のところへもどって、本を取ってきた。

「おまえには、うちの本を持ちだす權利なんかない。おまえは、かあさまもいつてるけど、居候なんだ。おまえはちっともお金を持ってないんだ。おまえの父親は、一

文の金も残さなかったんだ。おまえなんか、乞食でもすればいいんで、ぼくたちのような紳士の子どもといっしょにここに住んだり、ぼくたちと同じものを食べたり、かあさまにお金を出させて服を着たりする身分じゃないんだ。さあ、ぼくの本棚をかきまわしたんだから、思い知らせてくれるぞ。本はみなぼくのものなんだから。この家は、みなぼくのものなんだ。いや二、三年したらぼくのものになるんだ。扉のそばへいつて立っている。鏡と窓のところはよけてな」

はじめは彼がどういうつもりなのか気がつかなかったので、いわれるとおりにしたが、彼が本を振りかざして投げる動作を起こすのを見て、わたしは本能的にあつとさけんで身をよけた。しかしもはやおそかった。本は飛んできてわたしにぶつかり、わたしは倒れて、扉に頭を打って傷ついた。傷口からは血がながれ、ずきずきと痛んだ。恐怖がその頂点を越してしまつて、べつな感情がつきあがつてきた。

「意地悪のひどい人！」とわたしはいった。「あんたは人殺しそっくりよ——奴隸の監督そっくりよ——ローマの皇帝そっくりよ！」

わたしはゴールドスミスの「ローマ史」を読んで、かねがね皇帝のネロとかカリギュラなどがどんなものだったか、知っているつもりだった。それにまた、心

ひそかに暴君たちとジョンとを比較していたのだが、こんなふうに出していおうとは、夢にも思っていないかった。

「なんだと！　なんだと！」と彼はさげんだ。「こいつ、ぼくに向かってそんなことをいうのか？　聞いたかい、イライザとジョージアナ？　かあさまにいいつけてやるうか？　だがそれよりも——」

ジョンは、やみくもに飛びかかってきた。彼が、髪の毛や肩をひつつかむのを、わたしは感じた。だが、彼は、死にもの狂いのわたしとたたかわなければならなかった。わたしはジョンを、はつきりと、暴君、人殺しとして見たのだった。わたしは、頭から首すじへと血が一滴二滴したたり落ちるのを感じ、何か突き刺すような痛みをおぼえた。その感じが、しばらく恐怖心などを忘れさせてしまつて、わたしは気がいのように彼に向かった。自分の両手がどんなことをしたか、よくはわからなかったが、ジョンはわたしを「ねずみめ、ねずみめ！」といつて、大声でわめいていた。彼のほうには加勢がきた。イライザとジョージアナとが、二階にいるリード夫人を呼びに行ったのだ。夫人はベッシーと小間使のアポットとをしがえて、この場にあらわれてきた。わたしたちは、ひき分けられた。わたしはこういう言葉を耳にした——

「あら、まあ！　ジョンさまに飛びかかるなんて、なんて乱暴な！」

「こんなに恐ろしい暴れものを、見たことがあるでしうか！」

それからリード夫人も声を合わせた——

「この子を赤い部屋へつれて行って、鍵をかけておきなさい」すぐさま四本の手がわたしをとらえ、わたしは二階へ運ばれた。

二

わたしはずっと反抗しつづけた。わたしにはいままでもないことだったが、それは、ベッシーやアポットさんが、わたしをいけない子だと思いたがつている気持を、いつそう強める出来事でもあった。じつをいうと、わたしはすこし気が変になつていた。いやむしろ、フランス人がよくいうように、われを忘れていた。ほんの一時の反抗のために、すでに、何か怪しい処罰を受けなければならなくなつたことを感知しながら、わたしは反逆する奴隷さながらに、やぶれかぶれになつて、どんなことでもしてやろうと決心した。

「腕を押えてて、アポットさん。この子は気がいい猫みたいよ」

「恥知らずよ！　恥知らずよ！」と小間使がさげんだ。

「エアさん、なんておそろしいことをなさったの？ 恩人の坊ちゃん、若紳士をぶつなんて！ 若主人をぶつなんて！」

「主人ですって？ どうしてあの人、わたしの主人なの？ わたしは召使なの？」

「いいえ。あなたは召使にもおとるのよ。自分で食べてゆくために、何もしてないんですもの。さあ、腰をおろして、あなたの悪かったことをよく考えてごらん下さい」

このときはもう、二人はわたしをリード夫人がいった部屋へつれてきて、腰掛けにかけさせていた。わたしは衝動的にばねのようにとびあがろうとしたが、たちまち四本の手で押えられてしまった。

「じつとすわっていないと、しばっておかなけりゃならなくてよ」とベッシーがいった。「アボットさん、靴下どめを貸してくださいな。わたしのは、この人がすぐに切ってしまうだろうから」

アボットはあちらを向いて、ふとい足から、入用のひもをはずそうとした。このようにしばるものが用意され、こうしてなおさら屈辱が加わることを思うと、わたしは、いくらか興奮もさめた。

「それはずさないで」とわたしはさげんだ。「じつとしていますから」

その保証に、わたしは両手で腰掛けにしがみついた。

「じつとしてるんですよ」とベッシーがいった。そしてわたしがほんとうにおとなしくなったのを確かめると、押えていた手をゆるめた。それから彼女とアボットさんとは、腕組みをしたまま、わたしの正気なことが信じられないかのように、けわしい顔つきで、疑わしうにわたしの顔をじつとながめるのだった。

「この人は、こんなことは、いままでではしたことはないんですよ」と小間使の方を向きながら、ようやくベッシーがいった。

「でも、心の中ではいつもこうだったのよ」という返事だった。「わたし、奥さまにはこの子についての考えを何度も申しあげたんですけど、奥さまも同じご意見でしたわ。この子は、腹黒いのよ。この年ごろで、こんなに気の知れない子は、わたし見たことがないわ」

ベッシーはそれには答えずに、しばらくしてから、わたしに言葉をかけていった――

「あなたは、リード奥さまにはお世話になった恩があるというのを、忘れてはいけません。あなたを養ってくださったているのよ。ここから追い出されでもすれば、あなたは養育院へ行かなけりゃならないのよ」

この言葉には、何も答えることはなかった。それはべつにはじめて聞く言葉ではなかった。ものの心がついて以

来のかずかずの記憶をたどってみても、同じような暗示は何度も受けていたのだ。人のやつかいになっていることを非難する、こうした言葉は、わたしの耳には、とりとめもない歌い文句のようになっていた。心を痛ませ押しつぶすようにのしかかつてはくるのだが、その意味は半分しかわからなかった。アボットが口をはさんだ――

「それにあなたは、自分がお嬢さま方や若さまと対等だなんて考えてはいけない。奥さまがご親切に、あなたをあなたたちといっしょに育ててくださったっているんですからね。あなたたちは、そのうちお金をどっさりお持ちになるだろうけど、あなたはちっとも持てませんよ。へりくだって、あなたたちのお気に入るようにつとめるのが、あなたの身の上です」

「こういうのも、あなたのためを思つてなのよ」と、すこし声を和らげて、ベッシーがつけくわえた。「お役に立つ、感じのいい子になるようにしなけりゃいけないわ。そうすれば、ここに住みつくことができるでしょうけど、怒ったり乱暴なことをしたりすれば、奥さまに追い出されてしまいますよ。きつとね」

「それに」とアボットがいった。「そんな子は神さまの罰があたるわ。かんしゃくを起こしている最中に、神さまに打ち殺されてしまうかもしれないわ。そうしたら、どこへゆけばいいの？ さあ、ベッシー、この子をここ

へおいてゆきましよう。何をくれるといわれても、この子のような性質はたくさんだわ。エアさん、一人きりになったら、お祈りをなさい。心を改めないと、煙突から悪いものが降りてきて、あなたをさらってゆくかもしれないからね」

二人は扉をしめ、それに錠をかけて立ち去った。

赤い部屋というのは、真四角の室で、人が寝ることはめったになかった。ゲーツヘッドの館に、思いがけず来客がどつと押しよせ、館じゅうの部屋を全部使用しなければならぬときでもなければ、じつさい、使われたことはないといつてもいい。それでいながらこの部屋は、館の中でいちばん大きな、いちばん壮麗な室の一つだった。どっしりとしたマホガニ材の柱でささえられ、深紅色の緞子のカーテンをたらしめた寝台が、その中央に幕舎みたいに目だっていた。いつも錠戸をおろした二つの大きな窓は、同じ緞子の花づなやたれ幕に、なかばおおい隠されていた。じゅうたんは紅く、寝台の足もとにあるテーブルも、深紅の布でおおわれており、壁はほのかに淡紅色を流したやわらかな鹿毛色で、衣装だんすや化粧台や椅子は、黒光りするほどみがきあげた古いマホガニ材でできていた。こうした、まわりの濃い暗影から、高くそびえてしろじろとかがやいているのは、雪のようなマルセイユ織りの上掛けをかけた、山積みのマッ

トレスと枕まくらとだった。それにおとらず目だつのは、寝台の枕もとにある、たつぷりとクッションのついた安楽椅子で、これもしろじろと光り、その前には足台がおかれていて、わたしはよく思ったのだが、それは青白い玉座のようだった。

この部屋は、ほとんど火をたぐことがなかったので、冷えびえとしており、また子供部屋や台所から遠くはなれていたのも、しんと静まりかえり、またほとんど人が立ち入らぬことになっていたので、森厳な感じをあたえていた。女中だけが、鏡や家具から一週間のうちに静かにつもったほこりをふきとるために、土曜日ごとにここにくるのだった。それにリード夫人も、ほんのときたま、衣装だんすの秘密の引き出しの中身をしらべに、ここにはいるのだが、その引き出しには、さまざまな文書や、夫人の宝石箱や、亡き夫の小画像などがしまっていた。この亡き夫ということに、この赤い部屋の秘密——壮麗であるにもかかわらず、このようにも寂しいものになっている魔力がひそんでいたのだ。

リード氏が亡くなって九年になっていた。彼が最後の息を引きとったのはこの部屋で、ここに遺体が安置され、ここから棺が葬儀屋の手で運びだされたので、その日から、もの悲しい聖別の感じのため、この部屋へ人はあまり足を踏みいれなくなったのだった。

ベッシーと意地悪なアボットさんとが、わたしを釘づけくわづにしておいた座席は、大理石の炉棚ファルベリスのそばの、ひくい長椅子だった。わたしの前には寝台がそびえ、右手には、高い黒ずんだ衣装だんすがあって、やわらげられたとぎれとぎれの反射光を発して、その鏡板の光沢に変化を見せており、左手にはおおいをかけた窓があり、そのあいだにある大きな鏡が、人気もない寝台と室との荘厳さを映しだしていた。わたしは、ベッシーたちが扉に錠をおろしたかどうかはつきりわからなかったもので、動くだけの勇気がでけると、立ちあがって見に行つた。ああ！ やつぱり、これほど厳重な牢獄はなかったろう。もどつてくるのに、鏡の前をどうしても通らなければならなかった。魅きつけられたわたしの目は、何気なしに、鏡のぞかせている奥底をさぐつた。その幻想の洞穴ほらの中では、すべてが現実よりも冷たく暗く見え、そこでわたしをじっと見つめている奇妙な子の姿は、暗がりに点々と白い顔と腕とを浮かべ、ほかのすべてが静黙に沈んでいるのに、ぎらぎらと恐怖に光る目を動かして、まさに妖精ようせいのような感じを呈していた。それはベッシーの夜話の中で、荒野の羊歯だの茂るさびしい峡谷から出てきて、行きくれた旅人の眼前に姿をあらわすという、なかば妖精なかば小鬼の、小さな化けもののようにだとわたしは思った。わたしは椅子にもどつた。

その瞬間に、迷信的恐怖がわたしをとらえたのだが、まだそのときは、完全にわたしを征服してはいなかった。わたしの血はまだ燃えており、反抗して立つ奴隷の気概が、はげしい活気で、わたしを力づけていた。目前のぶきみに打ち負けるまえに、わたしは、胸にあふれてくるかすかすの思い出をせき止めようとしなければならなかった。

ジョン・リードの暴虐なふるまい、姉妹たちの誇らしげな冷淡さ、母親の憎悪心、召使たちのえこひいきなどが、わたしの混乱した心の中に、まるで濁った井戸のどす黒い澱渣おりかすのように浮かびあがってきた。どうしてわたしは、いつも苦しみ、いつもしかりつけられ、いつも責められ、いつまでも罰せられるのだろうか？ どうしてわたしは、人に氣にいられないのだろうか？ どうして、だれかにかわいがられようとつとめても、だめなのだろうか？ イライザは強情でわがままなのに、尊敬されている。ジョージアナは甘やかされて、ひどく意地が悪く、人のあらばかり探し、ごう慢にばかり返っているのに、だれからもちやほやされている。彼女の美しさ、淡紅色の頬や金色の巻き毛などが、顔を見るだれにも、よろこびをあたえ、どんな落ち度でも見のがしにさせる力があるらしいのである。ジョンに逆らうものはだれもなかった。まして罰するものもなかった。鳩はとの首をねじろ

うが、孔雀くじやうの子びなを殺そうが、羊に犬をけしかけようが、温室のぶどうの実をもぎとろうが、温室秘蔵の植物のつぼみをつもうが、おかまいなしだった。母親のことを「ばあさん」と呼ぶこともあり、ときには母親が自分と同じように浅黒い肌はくをしていると毒づいたり、彼女の願いをそっけなく無視したり、また彼女の絹服をひき裂いて台なしにすることすらも珍しくはないのだが、それでも彼は「かけがえのない愛いとし児」だった。わたしはあやまちをおかすまいと、びくびくしていた。どんな勤めでも充分にはたそうと努力していたのに、朝から昼まで、昼から晩まで、いたずらでうるさいだの、むつつりして陰険だのといわれつづけたのだ。

ジョンになぐられてたおれたときの傷で、頭はまだ痛んで、血が流れていた。ジョンがわたしを、めった打ちしても、だれもとがめるものがなかったのに、もうこれ以上の理不尽な暴力を避けようと、彼に手むかうと、みなからいっせいにのしりをあびせかけられるのだった。

「不公平だわ——不公平だわ！」と、わたしの理性は、苦悩の刺激に突きうごかされて、一時的ではあるが子どもらしくもない力強さで、さげんだ。また決意も同じくらいに目ざめてきて、耐えられない圧迫からのがれるために、何か並みはずれた手段——脱走するとか、それがうまくゆかないなら、飲まず食わずにいて自殺するとか

いうような——をとれと、そそのかすのだった。

「わびしいあの日の午後の、わたしの魂の恐慌を、なんといったらよろしいであろうか。わたしの頭はどんなに立ち騒ぎ、心はどんなに反乱をおこしていたことだろう！ しかし、なんとという暗闇の中で、なんとという厚い不可能の謎につつまれて、その心の戦いがなされたことだろう！ やむことのない心の疑問——どうしてこのようにわたしは苦しまなければならないのか、わたしには答えられなかった。いまは、距離をおいて——何年の距離と年数はいわないが——わたしには、それがはつきりわかっているのだが。」

グーツヘッド館では、わたしは不協和音だった。そののだけれとも似ていなかった。リード夫人とも、夫人の子どもたちとも、お気に入りの召使たちとも、調和すべきものは何もなかった。彼らがわたしを愛さなかったとしても、じつさい同じくらいに、わたしも彼らを愛さなかった。彼らは自分たちの一人と共に鳴できないものを、愛情をもって見る義務はなかった。気質も能力も傾向も、自分たちとは正反対の異質な人間、自分たちの利益にもならず、楽しみを増すこともない、一個の無用者。また、自分たちの扱いにたいしては怒りの芽を、判断にたいしては軽蔑の芽を、心の内にそだてている有害物。そういうものを愛情をもって見る義務はなかった。わたし

にはわかっていけるのだが、わたしがもし快活で、のんびりしていて、きびきびして、きりょうのいいお転婆さんだったら——同じように人の世話になる、寄るべない身の上であっても——リード夫人は、わたしがいるのをもっと満足そうにがまんしていたろうし、子どもたちだって、わたしに対してもっと仲間同士の暖かさを示したろうし、召使たちだって、わたしを子供部屋の「贖罪の山羊」(旧約レビ記参照。他人の身代。わりの罪されるもの。訳者)にすることはもっと控えたであろう。

日光は赤い部屋から去ってゆきはじめた。四時をまわっていたので、曇った午後がうらさびしいたそがれに移りかけていた。雨がまだ、たえまなく階段の窓をたたき、館のうら手の森では風がうなるのがきこえた。わたしは、しだいに石のように冷たくなり、やがて勇氣もくじけてしまった。屈辱感とか、自己への懷疑とか、みじめな憂うつなどの、いつもの気分が、力のおとろえてゆく憤怒の燃えさしの上に、しめつぽく降りそそいだ。みな、わたしが悪いといったが、たぶんそうなのかもしれない。餓死しようなんて、たつたいま、わたしはなんということを考えていたのだろう？ それはたしかに罪悪だ。それにわたしは死ぬ用意ができていのか。それとも、グーツヘッド教会の内陣の下納骨所が、そんなに気に入った目的地なのか。あの納骨所にリード氏は葬